

# 130周年祝酒プロジェクト

## 2015～16年度 農作体験から学ぶ地域の営み・関西を学ぶ

アントレプレナーシップ：第6次産業化・流通までの総合マネジメントと地域協働  
 大学や教室の垣根を越え、地域・社会連携の領域で、留学生とプロジェクトチームを組んで、  
 アントレプレナーシップにチャレンジします。



### 活動の概要

目的	大学、大学の様々なステークホルダー及び地域社会の間のかけはしを築くために、地域・社会連携の領域で、酒米作農家・創業300年の老舗酒蔵と連携し、田植えから収穫・酒造り・商品化・ブランド化までの全工程を体験学習することで、本学の創立130周年記念祝賀会（来賓1300人）において、ふるまい酒イベントで関大生の考動力を実践する。
連携メンバーおよび役割	太田光宣氏（丹波市市島、酒米農家）・・・酒米田の賃借及び農業指導 山名酒造株式会社社長 山名純吾氏（丹波市市島）・・・酒造担当、商品開発指導 授業科目「農作体験から学ぶ地域の営み」「関西を学ぶ」「大学と社会のかけはし」「食のアントレプレナー」履修生延べ200名（本学留学生を含む） ……無農薬自然栽培による酒米（亀の尾）の栽培、伝統的な酒造りを学ぶ。農業（草取り、田植え、収穫等）、マネジメント、第6次産業化、収穫した酒米のコンセプトメイキング・プロダクトデザイン、ラベルデザイン、ブランディング・市場調査・流通。 関西大学教育推進部教授 山本敏幸 他・・・プロジェクト進捗状況の管理、学生に対するアドバイス
活動地域	兵庫県丹波市市島地区
活動期間	2015年4月～2016年3月（「大学と地域社会のかけはし」、「食のアントレプレナー」で継続中）

### 連携の経緯

2014年より高槻市土室地区で食用米のブランド化を栽培から収穫までのプロセスを学ぶことで行ってきたが、米の第6次産業化の必要性を感じ、2015年より、関西大学130周年記念行事の一環として祝酒プロジェクトを地域・社会連携による協働型モデルで実施することとなった。2015年度は、丹波市市島の無農薬栽培農家とコラボで、幻の酒米「亀の尾」を栽培・収穫した。2016年度は山名酒造にて純米大吟醸酒を製造、商品化、ブランド化をおこなった。教室での授業の枠を超えた主体的学びを涵養するアクティブ・ラーニングとチームによる課題発見・課題解決型の学び（ICT活用）の実践を行ってきた。

### 解決すべき課題

- (1) 教室・大学の枠を超えたアクティブ・ラーニングの実践
- (2) 地域連携による信頼関係の構築と継続
- (3) 社会人基礎力（クリティカルシンキング・交渉学）を踏まえたコミュニケーション力の育成
- (4) 地域連携による全ステークホルダーの共感・信頼関係を通してのPBL(課題発見・解決)への合意形成
- (5) アントレプレナーシップ（流通までを考慮したプロダクトデザイン、商品化、ブランド化）



創立130周年記念祝賀会にて、山名社長、太田氏、学生たちと 商品化・ブランド化（写真左・右）

### 大学の役割

関西大学の教育カリキュラムである共通教養科目の授業の枠内で、創立130周年記念行事担当者としてコラボしながら、創立130周年記念祝賀会の振る舞い酒を商品化・ブランド化した。履修対象学生は本学学生及び本学への留学生（正規留学、短期留学を含む）である。

この活動は、丹波市市島地区の酒米農家の太田さんとの信頼関係づくりを通して、幻の酒米の栽培から収穫までを農業体験し、その上で、伝統的な酒造りを連携させて、第6次産業化のアントレプレナー、流通、コンセプトメイキング、プロダクトデザインまでの一連の流れを実践体験することを目指すものである。こうした農作物のブランディングは、流通も含めた地域社会の営みの仕組みを理解することにも深くつながっている。

また、この活動はチームベースのPBL（Project-Based Learning 課題解決型学習）と位置付けて展開している。地域の課題発見・解決を行うためには、地域に入り、一緒になって知識・知恵・経験・価値を共感し、信頼関係を築くことが不可欠であり、地域協働を通じて、教室や本からは発見できない地域課題の定義・解決を行っている。また、それはコミュニケーションによる信頼関係構築や、思いやりの大切さを学ぶことにもつながっている。この教育活動の価値を認め、支援して下さった理事長を始め、法人の皆様にご感謝の意を表する。

### 成果

- (1) 自然有機栽培で酒米を栽培し、第6次産業化することがチャレンジ科目で実践できた。
- (2) 地域・社会連携により大学のステークホルダー及び丹波市市島地区のみなさんとコミュニケーションによる信頼関係構築と思いやりの大切さと達成感を共感できた
- (3) アントレプレナーシップの涵養ができた
- (4) 授業を通して、地域社会の営みの仕組みに関する理解力を向上できた
- (5) グローバルチームでのPBLによる主体的な学習姿勢を獲得できた
- (6) ブランド化した商品の流通を実践できた



創立130周年記念祝賀会の様子

### 研究者の紹介



教育推進部 教授  
山本 敏幸  
(やまもと としゆき)



国際部 教授  
池田 佳子  
(いけだ けいこ)



教育開発支援センター 研究員 /  
非常勤講師  
奥貴 麻紀  
(おくぬぎ まき)



国際部 教授  
Alexander Bennett  
(アレキサンダー・ベネット)